公開シンポジウム「実践的地域研究の可能性」京都大学百周年時計台記念館, 2007 年 2 月 3 日.

何が視点を変えるのか
―開発の実践者／研究者としての経験をとおして―

黒崎龍悟（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程）

本発表が対象とするタンザニアでは 1980 年代後半の構造調整政策期以降、国際機関の影響を強く受けたさまざまな開発政策が実施されてきた。そのため、今日では研究者がフィールドで開発の場面に遭遇することは日常的なものとなっており、そこでは対象社会への意識的な「実践」を志向しない研究者も開発の場に関与せざるを得ない状況に立たされる可能性が高くなる。また、これまで開発の実践者や研究者のあいだには明確な境界が存在していたかのようにとらえられてきたが、近年では、フィールドの人々との関わり合いという意味においては、両者の境界は必ずしも明確なものではないとの認識が高まりつつある。このことをふまえて本発表では、調査・研究に取り組みつつ、より積極的に「実践」と向き合っていく可能性について地域研究者の立場から検討することを目的とする。発表者は青年海外協力隊員としてタンザニア南部における住民参加型農村開発プロジェクトに関わった後、現在まで同地域を対象にした調査・研究に従事している。実践者から研究者への立場の変化にともない、対象社会をとらえる視点は、すべての現象を開発の文脈へと収斂させるものから、人々の日常の文脈における開発をとらえるというものへと変化した。そして、農村開発の評価には、開発事業立案側が重視する従来の統計的手法に依拠するよりも、対象社会の実態を多面的にとらえた開発の民族誌を蓄積させていくことが必要であると認識していった。

開発の理念は、その基本方針が経済開発から社会開発へとシフトし、近年では人々の生活を包括的にとらえようとする視点や、開発の過程を重視する傾向がある。これらはフィールド・ワークの参与観察の考え方と近接している。また、研究者がフィールド・ワークの合間におこなう対象社会へのささやかな貢献を目的とした小規模な「実践」（e.g. 新しい作物の種を提供する）のありかたは、農村開発の手法において重視されている「住民参加型農村調査法」や「学びあい」といった手続きに近いものであるとも考えられる。したがって、これまで「実践」を積極的に意識してこなかった研究者も、開発の実践者や事業立案者と対話をするための経験を有しているのではないかと考える。従来の地域を総合的に理解しようとするフィールド・ワークにもとづきつつ、小規模の「実践」や開発の現象を意識的に記述していくことで、研究者はより「実践」と向き合うことができるのではないだろうか。